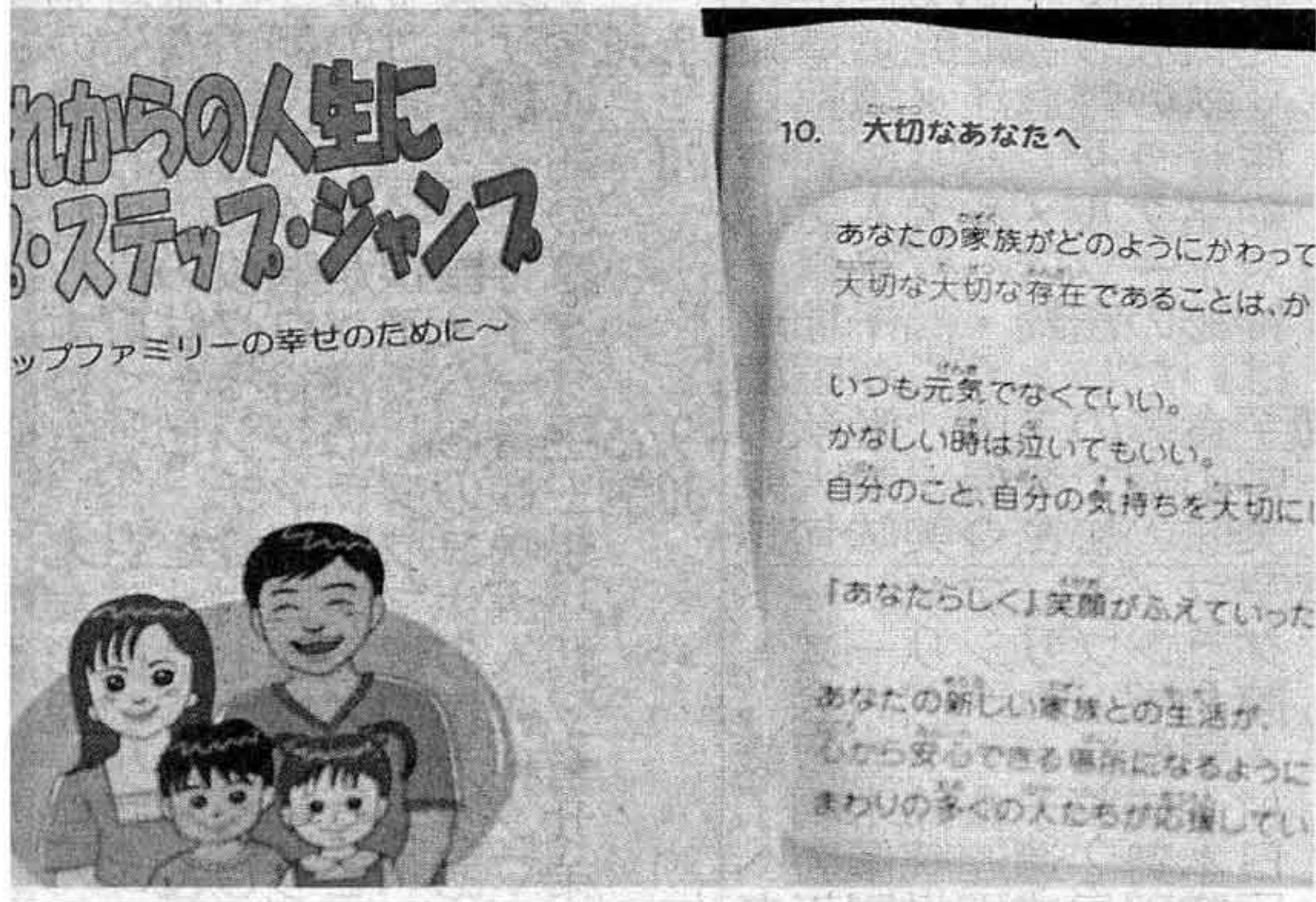


再婚義父 少女に虐待

「こんな思いなくして」

親子 きしむ 5

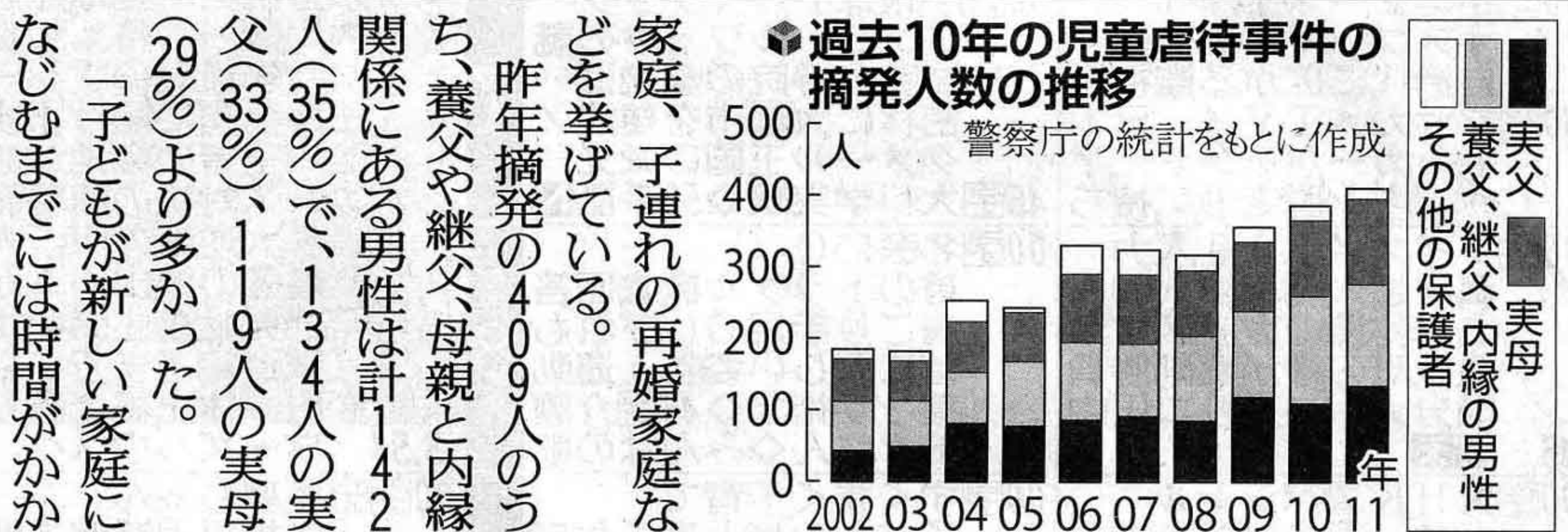
大阪市が作成した再婚家庭へのアドバイスをまとめた冊子。大人向け(左)と子ども向け(右)がある。子どもに向けては、「まわりの多くの人たちが応援しています」と呼びかけている



「急に全然知らない人が来て、どうしても『お父さん』と呼べなかった」
西日本に住む10代後半の少女は、母親が同席した取材に、消え入りそうな声で言った。
母親が自分と妹を連れ、義父と再婚したのは4年前。義父は幼い妹を棒でたたき、「おまえなんか死んでしまえ」などと理不尽な怒りをぶつけた。そんな義父に、少女はどう接してい

いか分からなかった。数年前から、義父に性的虐待を受けるようになった。「ママに言ったら、家族はバラバラになるぞ」などと脅され、誰にも相談できなかつた。昨年になって、ようやく母に打ち明けることができた。
この告白を機に、義父は逮捕され、実刑が確定した。離婚が成立し、今は支援者に支えられながら、居場所を隠して暮らす。

性的虐待は、被害を訴えることへのためらいから、表に出ることは少ない。児童虐待事件は増え続け、昨年の摘発人数は過去10年で最多の409人に上った。全体の約7割を暴行などの身体的虐待が占めるが、そのほかの多くが性的虐待だ。
こうした児童虐待は、なぜ起きるのか。厚生労働省は、自治体向けに作成した虐待防止の手引の中で、「虐待のリスクのある家庭環境」として、貧困や夫婦の不和のほか、同居人がいる



る。それを親が理解できず、子どもがなつかないことに腹を立て、しつげが暴力にエスカレートしてしまう」。児童虐待に詳しい西沢哲・山梨県立大教授は、多くの虐待がこうした悪循環で起きると見ている。
「3人の子育て経験があるから、里子1人であれば育てられるだろうと思ったが、そうはいかなかった」
そう語るのは、花園大教授の津崎哲郎さん(68)。元大阪市中央児童相談所長で、虐待防止のプロだが、3歳の時に引き取った娘を育てるのに四苦八苦した。最初は良い子を演じるが、次第に過剰に甘えたり、反抗したりするようになる。津崎さんは「こうした行動

は、新しい親が信頼に足りるかどうかを試す意味がある。親に対する反応が、実の子とは全く違うというところがもっと知られる必要がある」と話す。
「いきなり実の親子のようにはなれません」。大阪府は3月、子連れの再婚家庭向けの冊子を作った。きっかけは、2009年4月に起きた実母と内縁の夫による女兒(当時9歳)の虐待死事件。冊子には、悲劇を繰り返したくないという強

い思いが込められている。昨年結婚した66万組余のうち、再婚は約17万1000組(26%)で、20年前に比べて約3万9000組も増えた。子連れの再婚家庭は、新たな家族の形として定着している。
津崎さんは言う。「親が抱え込んでいる悩みを共有できる場を設けるなど、幸せな親子関係を築くための支援を行政がするべきだ」
◆
ご意見・ご感想をお寄せ下さい。あて先は右ページ下段「社会面に情報を」にあります。

代 永
お 人
10 万 円
川 崎 大 佛
霊 園
044
965-0965